



矢島 鈞次氏
(東工大教授・経済学)



佐伯 彰一氏
(東大教授・日本文学)



中嶋 嶺雄氏
(外大助教授・国際関係)



筑波 常治氏
(東大講師・科学史)



可会
鈴木 重信氏
(日本文化会理事・専務理事)



志水 速雄氏
(外大助教授・政治学)

〈特別座談会〉

精選・読者のための
良書30冊

いよいよ読書の秋です。斯界の権威が厳選して贈る現代人必読書30冊。すぐに購読できるよう出版元・定価も調べました。

良書とのめぐり合い

鈴木 現代はたいへんな出版洪水の時代でして、昨年度の新刊数だけ見ても二万四百四十六冊出ている。月間にしますと千七百四冊、一日で五十六冊ということだそうです。これは世界のランキングからすると二位か三位ということで、つまりGNP並みに、出版物においても日本は巨大国だというわけです。しかし、本の量はそうでも、日本人がほんとうに本好きなのかどうか、それは佐伯さん、いかがでしょうか。

佐伯 現象的には非常に本が好きだといえます。書物信仰といいたいくらいに。その理由はいくつかあると思いますが、すべての新しい知識は外国から来る場合が多かったわけで、それが書物を通じて行なわれたということでしょうね。これがひいては極端なくらいの書物信仰、活字で書いてあることは何でも、どんなにかさまでもそれなりに権威をもって通用するという傾向を

生じた……いくらか皮肉な意見ですけど。

鈴木 これはだいたいぶ前のアメリカの調査なんです。戦後十年間のアメリカのベストセラーは、一位から七位までがミッキー・スピレインのハードボイルド小説。つづいて料理の本やらがあつて、ジェームズ・ジョーンズの「地上より永遠に」という小説なんだそうです。これについて、アメリカのある知識人は、われわれの文化には血と勇氣と料理法と、ほんのわずかの神があるだけだと酷評されてもしかたがない、といっています。

で、日本でも本はたくさん出ているし、皮肉を込めた表現にしろ、心底、本好きの国民だといえるということなんだけど、では肝心のその質はどうなのかということがあるわけですね。

中嶋 それには何が良書かという問題があるんですけど、結論的にいえば、あんまり望ましいとはいえないでしょうね。その根拠ですが、最近の出版界では作られたベストセラー、そういうものが非常に多いですね。ある政治的な意図であるとか、宗教的イデオロギー的な傾向であるとか、ある

いは政治や選挙に結びついたような本が、ほとんどベストセラーになつて読まれています。

志水 いちばん極端な例が、糸山英太郎の「怪物商法」ですね。あれは自分もかなりPRしたんだろうけど、まわりで虚像として作り上げて、とにかくベストセラーにしてしまった……。

中嶋 これら作られたベストセラーは回転も早いですから、小売屋さんみだん店先に置きますけど、とうてい良書とは呼べません。むしろそのためにいい本のスペースがなくなってしまうという点でも、良書を阻害している。

佐伯 何が良書であるかという基準は、たとえばここに集まった六人ではそれぞれに違うだろうけど、出版のメカニズムにおいては、中嶋さんのおっしゃるように、回転の早いもの、売れるものというきわめて明確な基準の本が、それも日増しに強くなってくる、そんな感じは確かにします。

鈴木 それで思い出したのですが、こないだ調べてもらいましたら、小売の本屋さんに新刊書が棚に置いてあるのは二か月、

原則は六か月くらいですが、三分の一とい
うのが実情だそうです。

矢島 一般的にいえば、良書とよく売れ
る本ということの相関度はきわめて低いと
思うんです。むしろ回転が非常に遅いのが
良書ともいえるくらいで、したがって今の
出版のメカニズムの中では、良書はますま
す店頭から消えて行く傾向にありますね。

書評とはなにか

鈴木 要するに、グレンシャムの法則です
ね、悪書が良書を打ち崩しているのが現状
である……と。しかし、これにはそういう
作られたベストセラーにのっかる読者にも
問題はあるだらうけど、一般の人々にとっ
て、どういうことを手がかりに本を選ぶの
かという指針がないから、そうなるという
点もあるかと思えます。その指針のもつ
とも手っ取り早く、一般的な方法が書評な
んですけど、書評ということでは、これま
たいろいろと問題がありそうですね。

佐伯 確かに、出版界の事情が悪化し
たについては、書評の責任ということが、
一つ大きくありますよ。たとえば羽仁五郎

さんの「都市の論理」が相当読まれて影響
力もあった。そしてあの当時、これはすこ
い本だと褒めた人も相当いたわけです。と
ころが、今、冷静に振り返ってみたら、あ
れはこけおどしで、読むに耐えないという
ことになると思うんです。そうすると、当
時の批評は単なる宣伝にすぎなかったとい
うことになるわけですよ。

鈴木 書評がすっかり広告になつてい
るということですが、そのなかには意図的な
広告、つまり、こういうふうなのだけを読
ましてやろうという書評がありますね。い
つてみれば、広告とプロパガンダと書評が
三位混然一体……。 (笑い)

筑波 日本では、書評というのはだいた
い宣伝と決まつてゐるんじゃないですか。だ
から書評に取り上げるといふことは、この
本を褒めてくれ、褒めてやるといふ、要す
るに仲間褒めなんですね。

鈴木 そこに問題があるわけです。書評
というのは、所詮プロパガンダのことなの
か、あるいは仲間褒めか、それとも新しい
意味における批評なのか……外国の場合、
書評はジャーナリズムの一ジャンルとし

て、もっと確立した何かがあるようです
ね。

佐伯 ロンドン・タイムズなんか、何十
年前の書評を再特集して並べるといった
ことを時々やりますね。自分のところでや
った本の評価はこんなに明確だったと誇っ
ているわけですけど、またそれだけ、書評
に自信も責任も持っているわけですね。

それから、ハンナ・アレントが例のアイ
ヒマンの裁判の問題を本に書いて、それを
ニューヨーク・タイムズが書評したんです
ね。その書評者の名前は忘れましたが、
たしかニュールンベルク裁判の判事の一人
で、ですから彼はアイヒマンに対して相当
申し分もあって辛辣にやっただけです。そう
すると著者としても当然それに答えること
になる。しかも、これはユダヤ人問題が根
本にありますから、アメリカにとってはか
なりなホット・イシューなんです。です
から読者の側も賛否両論入り乱れて、タイ
ムズの投書欄はその後数か月にわたって、
この論争で持ち切りだったということがあ
りました。日本の場合、書評がそれほど話
題になり、論議的になっていくというこ

とは現状では望めないですね。

鈴木 書評の確立を阻害している要因として、どんなことが考えられましょうか。

佐伯 各新聞、雑誌とも書評は相当やるんですが、紙面がたいへん限られていて非常に窮屈なんです。で、一冊に割り当てられる枚数も二枚半とか三枚とか、きわめて少ないわけです。こうなると、たとえばその本について欠陥を見出しても、それをいうにはやはり根拠を示し、実例をあげなきゃいけない。根拠がないのに、パサッと斬ることもできないという気持ちも働いて、徹底した本格的な書評がなかなか書けないんですね。そこで四分の三から五分の四は、本の内容の紹介でお茶をにごすということになる。

もう一つ、仲間褒めということを筑波さんがおっしゃいましたけど、日本の社会はやっぱ狭くて、自分と関係のある専門の本だと、その著者ともいんな形で接触があるわけですね。そうなると、ほんとうの感想は書きにくく、どうしても結婚式の祝辞みたいな書評が蔓延しちゃうことになりがちですね。だから、あの本について書評

ではああいったけど、ほんとうは……というつぶやきの方に、真の書評があるという、困った現象がありますね。

筑波 どうなんでしょう。書評というのはアクセサリー、さしみのつまみたいに新聞にも雑誌にもついていますけど、一般の読者に対して、現実にはそれほどの力を持っているすかね。たとえば、昔はA紙の書評に取り上げられたら売れ行きが五千部遡うといわれたそうですけど、私も取り上げられたことあるけど、五千部も伸びなかったんで、たいした影響はないんじゃないかという感じがするけど……。〔笑い〕

志水 確かに書評の影響力はむずかしい問題だと思うんですが、一般の読者には、新聞に載る書評は本を選択する場合に、一つの基準になってるんじゃないかと思えますね。それから、書評の内容も問題ですけど、良書を阻害するもう一つの事情がありますね。本が出版される以前に、イデオロギー的な基準でもってすでに選択が行なわれるという点がそうです。翻訳ものの場合、その傾向が著しいですね。マルクス主義や左翼関係の文献はよく出るのですが、反マ

ルクス主義の立場の文献は、どういうわけか翻訳されない。名前だけはよく知られているのに、本は出ない。そのいい例がベルンシュタインで、彼の著作は日本では皆無といっていいんじゃないですか。トロツキは最近出てますが、これもずっと出ませんでした。

鈴木 そういう意味で、本をほんとうにその価値で評価するということが、ますます望まれるわけです。そこで、今日はあらかじめ五冊の本というのを先生方に選んでいただいておりますので、なぜそれが良書であるか、というふうなことをうかがおうと思うのですが、その前に、これまでのまとめとして、良書とは何だろうかということ、佐伯さんからおっしゃってください。その考えは六人とも違うでしょうから、佐伯さんなりの良書ということですね。

佐伯 ばくの場合、簡単に割りきって考えまして、一つは事実の本、自分が知らない事実を客観的に豊富に提供してくれる本ということですね。もう一つは、これもそれと関連しますが、今日とくに大事なのは自己の経験を語る本だと思えます。うつ

るな情報が乱れ飛ぶ現代では、自分がこういうふうな形で人生を、あるいは歴史を生きて抜いてきたんだという、生きた人間の証言、そういうものの意味が非常に大きいと思いますね。だから五冊を選ぶ際も、そういうことを基本にしました。

経済・科学・国際政治書

鈴木 では、矢島さんから五冊の本を選んでいただきましょうか……。

矢島 今は日本の経済がガラガラッと音を立てて崩れていつている時代ですね。そこで、戦後の経済の整理をする必要が、当然あるわけです。そしてその整理も非常に高度な、ごく一部の経済学者のみに理解されるということではなくして、一般的な常識を持つ人にわかりやすく説いたものが必要だと思います。そういう観点から、まず一般的な整理の著として、「図説日本経済論」（川口弘、篠原三代平編・有斐閣・一二〇〇円）。今、日本経済がどのように変わっていくか、どのような方向に進むかを、もっとも適切に指摘した本としては高橋龜吉氏の「日本経済の転換と進路」（東洋経済新

報社・九五〇円）を勧めたい。この本を読めば、インフレ問題は経済の問題であると同時に、すぐれた思想問題なんだということ、がよくわかります。

なお、これからは世界経済の動きを抜きにして、日本経済を考えることはできません。草柳大蔵氏の「世界王国論」（文芸春秋社・九八〇円）は、世界経済の根幹をえぐった、経済書以上の経済書として、高く評価したいと思います。自分のからだ、がベソになったという感じすら、この書には漂っています。

それから、企業は社会的な責任を果たせという議論が、日本の社会に定着しつつありますが、企業の本来のあり方とは何かという問題を掘り下げたのが、ドラッカーの「マネジメント」（野田一夫、村上恒夫監訳・ダイヤモンド社・上、下各四〇〇〇円）です。

これはドラッカーの考え方の集大成ともいえる本で、企業の果たす現在の役割と将来の役割が、ちゃんとした哲学として語られています。日本にはこういう形の哲学が非常に少ないだけに有益です。

ECについてはいろいろの本が出ていま

すが、荒川弘氏の「欧州共同体」（岩波文庫・二三〇円）以上の本は読んだことがあります。とくにアメリカとECとの関係についての分析は、世界的にも一級品であると思いますね。

筑波 私の場合、自然科学関係からということでしたが、やはり専門的な書物は避けて、科学的なものの考え方とどういうことかという、それを一応基準にしてあげてみました。たとえばガリレオの「天文学対話」やダーウィンの「種の起源」は自然科学ではなるほど古典ですが、素人が読んではたして理解できるかどうかわからないので、はぶきます。そして、いちばんやさしい古典として、ダーウィンの「ビッグル号航海記」（島地威雄訳・岩波文庫・上、中、下各二二〇円）をまずあげます。これも、まあむずかしいといえなくもないのですが、科学の古典というのは、最低この程度の歯ごたえはあるんだぞという意味でも、ころあいでしょう。

で、科学的なものの考え方を知るとなると、どうしても科学の発達の過程を知ることが必要です。つまり科学史の本というわ

いんなあととりっふ
話題の最新刊!!

吉行淳之介 着流し対談

「どんな人とも同じ
平面で語りあいたい」
各界12氏とのエスプリ溢れる対談集



株式会社いんなあととりっふ
港区麻布台1-9-3 振替東京135024

けですが、これではあげられませんが、メイソンの「科学の歴史」(矢島祐利訳・岩波書店・上、七〇〇円、下、六五〇円)です。メイソンは科学の個々の学説や事実の解説でなくて、全体を通しての考え方の流れというか、思想の流れを追っています。科学史の次には、たとえばダーウィンが生きた時代に、なぜ彼だけがそういう独創に至りつたかといったことが問題となります。となると、科学者の人物論といえますか、しっかりした伝記がどうしても欲しいところですね。そういう意味で、ツヴァイクの「マゼラン」(関楠生、河原忠彦訳・みすず書房、一〇〇〇円)を勧めます。マゼランは探検家ですが、探検も科学的な業績の一つですから……。マゼランは資料が非常

に乏しい人物ですが、ツヴァイクはわずかの資料から存分に想像力を伸ばして、探検家の一つの真実をつかみ出しています。それから、科学的な立場で人生を見ることが申します。とくに最近では生態学なんかともからんで、生物の一種としての人間といった議論がさかんです。その種の新しい本もいろいろと出ておりますが、私はそういう類の本としては、日本の明治から大正にかけて活躍した丘浅次郎の「著作集」(全六巻・有精堂)は今でも抜群にいいものだと思います。もし、強いて選べというのであれば、この中に「生物学講話」(二五〇〇円)というのがあります。それと評論集で「煩悶と自由」(二〇〇〇円)、この二つをあげたいですね。

最後に、科学の研究というのはどういうふうになるか、つまり科学的な思考の展開といったことについては、理科の教科書なんか読むよりも、すぐれた推理小説を読むのがいいんじゃないかというものが、私の持論でして、そういう例として高木彬光氏の「成吉思汗の秘密」(光文社・五八〇円)をあげます。これはテーマ自体が一つの研究にもなっている。なかなかの傑作です。

中嶋 私は国際関係あるいは外国研究ということだったので、まずヤン・ミュルダールの「中国農村からの報告」(三浦朱門、鶴羽伸子訳・中央公論社・九八〇円)をあげます。彼はスウェーデン人としての特権を利用して、一九六〇年代の初頭、延安近郊の農村に一月滞在しました。こ

れはその時のレポートですが、今日の中国を理解する上で何よりの本です。

次にジョージ・オーウェルの「一九八四年」(新庄哲夫訳・早川文庫・三五〇円)。この本はある意味で、世界が米中ソ三大國によって分割されるという仮説であります。その八四年にあと十年間という時期にわれわれは当面しているわけで、その十年でわれわれの将来がオーウェルの世界になるかならないか、という予測としても興味深いですね。

日本人の著作では、まず村松道雄さんの「五代群雄伝」(中央公論社・七五〇円)を勧めます。現在の中国をイデオロギー的に、あるいは情緒的に見る傾向が非常に強い中で、中国人とか中国民族の体質というようなものを、いわば権謀術数うずまく五代群雄伝の世界になぞらえた読み物です。この下敷となった古典はあるのですが、とつても村松さんらしい、すばらしい作品に昇華されていますね。

信夫清三郎さんの「朝鮮戦争の勃発」(福村書店・七〇〇円)は、今日の日韓問題の根源ともいえる朝鮮戦争について学問的

に総ざらいをしまして、結論的には北側からの要因を非常に鋭く指摘している本です。朝鮮戦争についてはきわめて一面的な見方、イデオロギー的プロパガンダが氾濫したのですが、信夫さんは安保体制を批判するような立場の人にもかかわらず、あの戦争をもたらした北側の要因をピシッといっている。国際政治を勉強する一人として、私が感動して読んだ本であります。

最後に日本の学者が国際政治を扱った著作として、永井陽之助さんの「平和の代償」(中央公論社・五五〇円)はあげるべき本でしょう。この書はわれわれが気付きにくい、あるいは日本の理想主義者の盲点をついた現在の国際政治の構造分析として、非常に興味深い本です。

政治・文学・文化書

志水 私がここに選んだ五冊の本、なぜこういうのを選んだかという基準のようなものをまず申し上げますと、日本の一般の読者とくにインテリには、政治に対する非常に強い嫌悪感がある。とにかく政治は諸悪の根源であるといった観念があるのです

が、といって政治とは何であるのかということについてのつきつめた議論は、ほとんどありません。そこで、政治とは何かを考えるでだてといった意味で選択したわけ

ハサンケイの本・新刊ニュース

- ◆「誰も書かなかった中国―毛沢東の「収容所群島」」包若望著、八〇〇円
- ◆「誰も書かなかった台湾―「男性天国」の名に隠された真実」鈴木明著、六八〇円
- ◆「誰も書かなかったアラブ―「ゲリラの民」の詩と真実」山口淑子著、六八〇円
- ◆「血液型愛情学―愛と性のドラマ20000人の証言」能見正比古著、七〇〇円
- ◆「血液型人間学―あなたを幸せにする性格分析」能見正比古著、六八〇円
- ◆「JEANSの本―世界を占領した「青の制服」」北本正彦著、六八〇円
- ◆「共産党よ、騙るなかれ―仮面に隠された矛盾を衝く」戸川猪佐武著、七〇〇円
- ◆「ニュールンベルク裁判―暴虐ナチへ」監場からの告発」レオ・カニン著、加藤俊平訳、七〇〇円
- ◆「肌じめり」宇能鴻一郎著、六八〇円

す。

で、最近の著作として比較的手ごろでいいのが、バーナード・クリックの「政治の

井証」(前田康博訳・岩波書店・五〇〇円)という本です。この書は政治を侵害する要素といったことを問題にしていって、その中には民主主義とか各種のイデオロギーも含まれている、なかなかユニークな書です。

それから先ほども名前が出ましたが、ハナ・アレント。彼女はユダヤ系のドイツ人でアメリカに亡命した人ですが、この人の著いた「人間の条件」(志水蓮郎訳・中央公論社・一六〇〇円)という本があります。

これは人間の行動を活動、仕事、労働という三つの点から分けて、人間を人間たらしめている条件は何かということを探った政治哲学の本です。

この二つの本を読むと、日本人の政治に対する考え方もかなり改められるんじゃないかと思えます。その上で永井陽之助さんが編者になっておられる「政治的人間」(平凡社・七〇〇円)をお勧めしたい。「現代人の思想」シリーズの中の第16巻の論文集ですが、とくに、その中にエリック・ホッファーという、哲学者で同時に沖仲仕というアメリカ人が書いた「アポリズム」という論文があって、今日の日本人にはたいへ

ん耳の痛いことが、人を刺すような短いことばで書かれているんです。

つぎに清水幾太郎さんの「現代思想」(岩波書店・上、下各六〇〇円)は、著者がこれは二十世紀の思想のスケッチだといっている本ですが、思想的にわれわれはどういう位置にいるのかということを知る上では、非常にいい本だと思います。

以上四冊、どれもこれもちょっととつつきにくく、私の好みもムキ出して、しかもなかなか難解なものもありまして、その上さらに現代の日本の政治に直接には結びつかない面もあるのですが、(笑い)最後の本だけは座談形式でもあり、わりと気楽に読めると思います。会田雄次さんほかの「日本に政治はあるか」(恒文社・一二〇〇円)がそれですが、ここでは現代日本が直面しているさまざまな政治問題、とくにこれまでタブーとなっていた問題を真正面にすえて、ここに実は問題があるのだということ、多くの人たちが指摘しています。

佐伯 ぼくの場合、文学あるいは文化ということで非常に数が多いですから、どう選んでも個人的な趣味にならざるを得ない

んですが、その選択の基準の一つは、現代の日本人としての共通体験を、作家がどうとらえているかということです。となると何といっても太平洋戦争がありますが、それを素材にした小説を二つあげます。

井伏鱒二さんの「黒い雨」(新潮文庫、二四〇円)は広島島の原爆の問題をとらえて、実に沈着で、しかも事実を率直に直叙しながら、いかにして国民として人間として生き抜くかということが書かれています。これは戦後文学の中でも、最高の傑作の一つであらうと思いますね。

阿川弘之さんの「暗い波濤」(新潮社・上、下各九八〇円)は、最近出てわりと評判になった本ですが、当時の青年にとって政治とは何であったかということを、具体的な実例、実感を通しながら、しかも非常に巨大な、交響乐的な形できざみ上げたという点で重要な作品といえます。

国民的ということはいったんですが、日本文学にはもう一つの伝統の流れがあります。それは個人的な心境とか、プライベートな生活を通じて真実を語るといふやり方で、平安朝以来の豊かな文学伝統です。そ

ういうものの一つの結晶として、宇野千代さんの「或る一人の女の話」(文芸春秋社、一八〇〇円)。これはある意味では單純率直な私小説ですが、それでいて文体も非常に透徹して、明晰で澄んだ味わいという点では、世界の文学にも例が少ない見事な出来栄です。

さつき良書の条件ということで、私は個人的な体験の吐露ということをやったのですが、その実例として二冊、まず田中美知太郎氏の「時代と私」(文芸春秋社・九八〇円)を推します。この本は題が象徴しているように、自分の個人の立場に即しながら、しかし全体として日本の経てきた歴史を生き生きとらえているエッセイ集です。

柳田国男さんの「故郷七十年」(筑摩書房・九〇〇円)の場合、個人的な回想記という形をとりながら、その個人の生涯の中に生きている歴史や伝統というものを、イメージ豊かに描きあげています。

古典を読む必要

鈴木 どうもありがとうございます。
皆さんのお話をうかがって、良書とは何か

という、現代人の読書ということについて、たいへん示唆深い指針が得られたと思います。

そこで私は次の五冊を選びました。「プラトン」(アレクサンドル・コイル著、川田繁訳・みすず書房・九五〇円)、「孔子伝」(白川静著・中央公論社・九八〇円)、「正統とは何か」(G・K・チェスタートン著、福田恆存、安西徹雄訳・春秋社・二二〇〇円)、「アフリカ創生記」(ロバート・アードレー著、徳田喜三郎他訳・筑摩書房・一三〇〇円)、「脳と保育」(時実利彦著・雷鳥社・九八〇円)——。しかしこれらの個々について説明することをやめまして、締めくくりを兼ね、ぼくの感慨を述べたいと思います。

それは二つあります。本は沢山出ているけれど、いい本に出会わない、発見できない、あるいは選択できないという指摘が今日の話でありました。つまり日本人は、実際上は本を読まなくなってきたというわけですが、しかしそういうふうになれば、人間は必ずどこかに不安とか空洞を感じるだろう。例のオカルトブームは、その表れではあるまいか、ということが一つで

す。そこで、そういう時代風潮があるからこそ、何千年の風雪を生き抜いてきた古典を読む必要があると勧めたいわけです。これらは何千年と読まれながら、しかも少しも輝きを失わないのですから、人間の本性について、きわめて深い洞察を示しているといえるはずで

す。もう一つは、自分の経験を科学的に見つめ直すということ、今の日本人はやるべきだということです。科学的なものの考え方、事実に基づき、そして経験というものをたいせつにする、という習慣をわれわれはもっと身につけるべきだと思うのです。

これはオカルト的なものを避けるためでもあります。真に生きるといふことは、自らを客観的に見る目がないとなかなかむずかしいから、というためでもあります。佐伯さんが著者の個人的経験の重さということとを良書の条件の一つとして掲げられたのですが、そういう書物に学びつつ、自らを見通して欲しいこと、切なるものがあります。でない、オウエルのいう八四年が日本の上にやってくるという気がしてしょうがないんです。